

第9分科会 交流及び共同学習

テーマ「心のバリアフリー」の実現に向けた交流及び共同学習

提案2 「ボッチャ」を中心とした附属学校園における取組について

発表者	愛媛大学教育学部附属特別支援学校	教 諭	谷口 泰祐
司会者	愛媛大学教育学部附属特別支援学校	教 諭	井上 真佐子
助言者	島根県教育庁 特別支援教育課	指導主事	三浦 睦美

I 実践に当たって

I 学校の概要

本校は愛媛大学教育学部附属の知的障がい特別支援学校で、小学部から高等部まで60名の児童生徒が在籍している。同じ敷地内に、附属幼稚園、小学校、中学校が設置されているという全国でも珍しい立地条件にあり、近距離にある附属高校とともに、「附属5校園」として共通主題を掲げ、日々の実践・研究を行っている。本校では、キャリア教育の視点に立った教育活動を進めており、「貢献」をキーワードに、地域（子供たちが意識できる、顔の見える相手）と「一過性でない、相互作用による学び」を目指した活動を展開することを重視してきた。今回は、中学部の生徒たちが隣接する附属中学校の生徒と共に実施した「とくしんピック 2020」という競技会及び「ボッチャ」を中心に大学と連携・協働しながら行った、附属小学校、附属中学校、附属高校との交流及び共同学習について述べたい。

II 実践内容

I 附属中学校との交流及び共同学習～「とくしんピック 2020」を中心に～

中学部では、愛媛大学の大学院生と共同で行った保健体育科の授業「とくしんピック 2018」（「ボッチャ」などの3種目で行う競技会）をきっかけに、体育の授業に「ボッチャ」を取り入れて活動してきた。生徒たちから「いろいろな人たちと一緒に『ボッチャ』をしたい」と望む声が聞かれるようになり、同年代の附中生（1年D組）と一緒に競技会「とくしんピック 2020」の活動に取り組むことになった。

両校の生徒にとって意味のある活動になるよう、「生徒が多様な人々と協力・協働しながら目的に向かって活動する」ことを共通のねらいとし、「『とくしんピック 2020』の開催」という具体的な活動を設定することで、生徒たちが明確な目標を共有し、主体的に取り組むことができるようにした。活動の流れは次の通りである。

実施時期	活 動 内 容	※必要に応じて教員の話合いを行う。
1 学期	事前学習	活動の呼び掛け、作業学習・ボッチャ体験
	「とくしんピック 2019」	プレ大会として開催
2 学期	交流会①	特別支援学校体育館で開催
	交流会②	中学校体育館で開催（附中生の希望）
	本大会準備活動	本大会の準備（特別支援学校で開催）
3 学期	「とくしんピック 2020」	本大会の開催（2020年1月26日）

競技会では、「する・見る・支える」の3つの役割を生徒一人一人が果たしながら活動できるよう工夫するとともに、単発のイベントに終わらず、理解を深めながら継続して活動していけるよう、交流会や大会に向けての準備活動を行うようにした。

初めて顔を合わせた1学期の事前学習では、どう関わってよいのか戸惑う様子が見られたが、プレ大会では、一人一人が競技会の成功に向けて役割を果たす中で、自然に関わり合う姿が見られ始めた。附中生からの申し出により、附中生の主催で実施することになった2回目の交流会では、本校の生徒に分かりやすいよう道具を工夫し、丁寧に説明しようとするなど、積極的な関わりも見られるようになってきた。本大会の準備活動では、「ボッチャのコツを伝える」「チーム別のワッペンを作る」など、本校生徒のよさや得意なことを生かせるような活動内容を設定することで、附中生と本校生徒の間に「教えたり、教えられたりする」新しい関係性が生まれ、活動の最初にはなかった自然でスムーズな関わりが見られるようになった。

このような積み重ねの上に開催された「とくしんピック 2020」では、生徒たちからぎこちなさやためらいが消え、ハイタッチし、名前を呼び、声を掛け合いながら生き生きと競技や応援、運営に取り組む姿が見られた。ゲームコーナーを通して交流のある附属幼稚園の園児たちも、手作りの応援グッズを持って応援に訪れ、中学生の活躍に大きな声援を送るなど、附属校園が一体となった競技会となった。

2 附属高校との交流及び共同学習～高校生が企画・運営する「ボッチャ」競技会～

大学と附属校園が連携・協働する取組の一環として、附属高校の3年生女子1クラスとの「ボッチャ」競技会を行った（11月に実施）。高校生たちはパラリンピックの意義や障がい者スポーツについて学習しており、その経験を生かして自分たちで「ボッチャ」の競技会を企画し、運営を行った。本校の生徒たちがスムーズに活動できるよう、「とくしんピック 2019」の枠組を用いることにした。

一緒に活動するのは当日だけであったが、ボッチャのゲームを通して、自分たちのチームだけでなくお互いの素晴らしいプレーに声援を送るなど、楽しく積極的な関わりが見られた。この日に向けて、高校生は主体的に企画・準備をし、中学部の生徒も「高校生に勝ちたい」という意識でボッチャの練習に励むなど、お互いが共通の目的意識をもちながら活動を重ねてきたことも成功の一因であったと思われる。

「障がいがあってもなくても対等に戦うことができ楽しかった」など、ボッチャというスポーツの価値に気付いたという感想や「障がいのある人たちがこんなに明るく元気だと思わなかった」というような、障がい者に対するイメージが変わった、という感想も多く寄せられた。高校生にとって、事前の学習で知識として理解していたことを実際の活動を通して実感し、より深い理解につなぐことのできる機会であったといえよう。この後も、「とくしんピック 2020」に全員で応援のビデオメッセージを寄せてくれるなど、高校生の心に深く働き掛ける取組となった。

3 附属小学校との交流及び共同学習～「ボッチャン・マドンナ投合戦！」～

附属小学校（2年花組）との取組は、小学生を中学部の「ゲームコーナー」に招待し、その後、中学部と附属高校との「ボッチャ大会」に小学生が応援に来てくれたことから始まった（どちらも11月に実施）。中学部の生徒たちが「ゲームコーナー」を運営する姿やボッチャ大会で楽しんでいる様子に刺激を受けた小学生たちは、自

分たちで「ボッチャン・マドンナ投合戦！」という競技会を企画、小学生からの挑戦状を受け取った中学部の生徒たちもその競技会に参加することになった。

最初の練習試合（1月）では中学部の生徒たちが圧倒的な勝利を収めた。残念そうな小学生の様子に、中学部の生徒から「対戦相手だけど、ボッチャがうまくなる秘密を教えてあげたい」という声が上がリ、小学生に教える時間をもつことになった。大学生から教わり、自分たちのものになってきたボッチャのコツを小学生に教えるという経験は、中学部の生徒たちにとって、大変貴重なものであった。小学生たちは進行や応援の方法についても中学部の生徒の様子から学び、競技会当日は、競技はもちろん、運営も自分たちの力で立派に行った。中学部の生徒も、「ボッチャ」の先輩として、自信をもって競技会に参加し、力を発揮することができた。

Ⅲ 成果と今後の課題

今回の取組で私たちが目指してきたのは、「障がいのある生徒と障がいのない児童・生徒が、競技会を成功させるという同じ目的に向かってどのように関わり、それぞれの役割をどのように果たしながら目的を達成していくか」ということであった。同じ目的を持ち、そこに向かって取り組む過程の中でこそ、「相互に理解を深めようとコミュニケーションをとり、支え合う」こと、すなわち「心のバリアフリー」が実現されるのではないかと考えたからである。

本校の生徒たちにとって、今回の取組は、「自分の力を発揮して貢献したい」という自分たちの思いを、様々な人と関わりながら思い切り発揮できる素晴らしい機会であり、意味のある経験となった。そこで得た達成感や成成感や生徒たちの大きな自信となり、仲間と協力しながら役割を果たす中で深まった自己理解・他者理解は、それ以後の生徒たちの行動の基礎ともいえるべきものになっている。

一方、交流及び共同学習を行った児童・生徒にとって、今回の取組がどうであったのかをそれぞれの感想から振り返ってみたい。

「障がいのある人は暗いイメージがあったけど、すごく明るいし、礼儀正しくスポーツに対して真剣でいい人たちだと思った。関わってみないと分からないことばかりだったので、たくさんの人と関わる機会を作って、固定観念が消えていくといいと思った」附属高校生の感想である。この感想にあるように、自分がもっていたイメージが「固定観念（＝偏見）」であることに気付き、直接関わることでそれらが払拭されることを願うようになったことは意義深い。

「最初はやらされている、合わせている感じだったけれど、今は自分でやっている。自分を出して成長できた」附中生の感想である。彼らにとって今回の取組は、中学部の生徒という「他者」との出会いを通して、あらためて「自分自身」と向き合う機会であった。「やらされていた」という意識が「自分でやっている」という意識へ変容し、自分のこととして捉えたことで得た「成長できた」という実感は、単なる知識の上での障がい者理解にとどまらない、大きな意味をもつものである。

最後に小学生の感想を紹介したい。「今日、ボッチャを特しとっしょに練習しました。特しの人たちはとても『キラキラ』していました。どこかというとおうえんです。チームはもちろん、相手にもおうえんしていました。そのとき私は『かっこいいな』と思いました。それにとっても『やさしい』のでびっくりしました。なぜならひみ

つを2つも教えてくれたからです。1つ目は『リズムよく』、2つ目は『中指をのばす』です。また、大会をするのがとても楽しみです！」一緒に活動する中で小学生が感じた「特支の人たちがキラキラしている」という印象こそが、「心のバリアフリー」が実現されている状態なのではないだろうか。それは、中学部の生徒が活動に精一杯、自信をもって取り組んでいる姿に対して小学生が感じた素直な印象であり、生徒たちの真剣な姿は、私たちが言葉を尽くすよりもはるかに強く、周りの人の意識を変える力があることを実感させられた。私たちの仕事は、生徒たちが「キラキラ」輝けるように環境を整え、適切な支援を行っていくこと、そしてその輝いている姿を周囲の人々に知ってもらうことに尽きるのではないかと思う。

去年はコロナ禍によって活動の中断を余儀なくされたが、活動の形を変えて、中学校とは「とくしんピック・リモート大会」を、小学校とは「リモートボッチャ大会」を実施することができた。リモートであっても集中して活動に取り組み、お互いのプレーをたたえ合う生徒たちの姿に、一昨年の経験が生きていることを実感した。今年度も形を変えながら、交流及び共同学習を継続している。

障がいのあるなしに関わらず、それぞれのステージにおいて「自分の力を発揮したい」「役割を果たして貢献したい」という思いが子供たち一人一人に内在していると考え。その思いを、共通の目的に向かって、協力しながら具体的な行動として表現し、関わるすべての子供が「キラキラ」輝くことが、抽象的ではあるが、「心のバリアフリー」の実現につながるのではないだろうか。そのような「場」としての交流及び共同学習の在り方を今後も模索していきたい。

〈指導・助言〉

本実践では、両校の生徒が本学習の意義を理解しながら、共通のねらいに向かって取り組んでいる様子がうかがえる。明確なねらいの設定により、その達成に向け、両校の児童・生徒から自発的な活動や提案が生まれていることに注目したい。また、中学部の生徒たちの主体性に基づく活動への「貢献」、それを「キラキラしている人たち」と感じ取る小学生の姿は、まさに「心のバリアフリー」が目指すところと共通すると考える。

「共同学習」では、両校間で学習指導要領のどの項目を取り扱うのか、学習活動を通して資質・能力の三つの柱のどの部分の伸長を目指すのかについての検討と共通理解を図ることが大切であるが、児童生徒にもそれらが理解できる形で提示されていることにより、より効果が見込められると思われる。

評価を行う際は、児童生徒から何らかの形で表出される事柄から、成長に関わる部分を教師が見取ることになる。表情や行動の変化も重要な評価の要素であるが、常に客観性に基づいた評価が行えるよう留意することが大切である。また、日本においては、各教科等の振り返りにおいても「文字で書かせる」という文化が根付いている。「書く」という活動における、知的障がいのある子供たちのバリアとして、例えば「文字を正しく書かなければならないこと」「文章を正しく構成しなければならぬこと」「自分の気持ちや感情を他者に伝える一般的なことばに変換しなければならぬこと」等が考えられる。取り除くべきバリアは一人一人異なり、マニュアルはない。児童生徒が自分の持てる力を最大限に生かして自らの成長を表出できる方法について教師が柔軟に考え続けることで、真の評価に近づくことが可能になり、ひいては「個別最適な学び」の実現による資質・能力の育成を図ることができるようではないだろうか。